

一八四七年善光寺地震と弘化高田地震―『虎勢道中記』より―

矢田 俊文

弘化四年（一八四七）三月二十四日夜十時頃、長野県飯山市から千曲市まで伸びる長野盆地西縁断層を震源域としてマグニチュード7.3程度の地震が起った。善光寺地震と呼ばれる地震である。この地震の被害は新潟県の高田平野に及んだ。その五日後の三月二十九日、善光寺地震に誘発され高田平野東縁断層を震源域と推定されるマグニチュード6.5程度の弘化高田地震が起った。⁽¹⁾この二つの地震を越後に旅行中の江戸の商人が体験して記録に残していた。それが本書の『虎勢道中記』である。

善光寺地震についてはよく知られているが、五日後の弘化高田地震についてはそれほど知られていないのではない。そこで、本稿では『虎勢道中記』に限ってではあるが、一八四七年善光寺地震と弘化高田地震の二つの地震について検討しつつ、道中記から読み取れる知見について記してみたい。

『虎勢道中記』の地震記事についてはすでに、北原糸子氏によって次のような説明がなされている。⁽²⁾

一つ目は善光寺地震の体験について。道中記の筆者は「六半頃」寝たところ、人々が大騒ぎをし、地震の鳴動と大きな揺れで目が覚めた。立とうとするがよろけて立ち上がれないほどの揺れで、逃げようにも場所

がわからず困惑した。板葺きの屋根に載せた石が揺れる度に転び落ちた、と記事をまとめている。二つ目は本書には善光寺地震の二十年前に起った三条地震のことも記されているが、この地震で三条地震の時の記憶が地域の人々には強く蘇ったようであるとしている。三つ目は周辺地域の被害について。付近を流れる川の水が地震で揺れる度に溢れ出たり、年貢米を運ぶ舟が米ごと陸に打ち上げられたり、川のなかでひっくり返ったりしていた。川から米を引き上げるなど、人々は大騒ぎだった、とまとめている。また、打越村（新潟市西蒲区、旧中之口村）では、苗代が地震のために一筋に寄ってしまったと地震後の様子をまとめている。四つ目は善光寺地震のかわら版の写しについて。善光寺地震について地震後四、五日して多くのかかわら版等が出されているが、本書にもその一片が書き写されていて、それはかわら版「信越大地震」であるとしている。

以上の北原氏の説明にそれほど付け加えることはないように思われる。しかし、これら以外にも記しておくべき重要な点があると考えるので、三点について検討したい。

第一点は、地震のかわら版をなぜ道中記に写したのかについてである。本書にかかわら版「信越大地震」が写されていることはすでに北原氏が指摘されている。なぜ本書の筆者はかわら版の全文を道中記に写し入れたのであろうか。

『虎勢道中記』四月十一日条に、「旅日記を認める」とあるので、旅行中に旅日記が綴られていることは間違いないが、地震については日にちに関わらず、時としてまとめて記述されている。例えば、後に掲げるように、三月二十四日条には、二十九日の地震の記事も記載されている。帰国して道中記を仕上げる際に整理

したことが想定される。道中記のかわら版も、後日地震に遭遇した越後国吉田の宿屋の項に組み入れたことがわかる。

本書の序文には、次のように記されている。

一、此巻中に信越二ヶ国の地震の条を記、是強て道中記に入べきにあらず、然ども古来稀なる大地震にて、既予も善光寺へ参拝、夫より三日を過、後州吉田の街に泊、此大事に出合、其危事大方ならず、斯ハあれども嬉しきかな、兩人とも無難にて帰る、其祝さに、長文くたく敷も巻中に記て置ぬ

尤、地震の条は世上板摺になし、売物其俣を写置、依て文言の読、またハ相違のケ条ま、多からんか、はんじ
考見あるべし

この序文には「この巻に信濃・越後二か国の地震のことを記す。これらは強いて道中記に入れるべきものではないが、古来稀な大地震で、私も善光寺へ参拝し、三日を過ぎ、越後の吉田町に泊まっていた時にこの大事と出会った。大変危ないことであつたが、嬉しいことに私と伴の者ふたりとも無事に帰った。その祝いとして長文をながながとこの巻に書き記して置くことにする。もつとも、地震の記述は世の中に出回り販売されている板摺をそのまま写し取つた。よつて、文言の読みや間違いの箇所も多かるうから、よく判断して読んでほしい」と書かれている。旅行中に地震を体験し、幸いにも無事に帰国できたので、地震のことを書いたのだという。

地震被害を記した出版物をそのまま日記等に書き写す事例はほかにもある。信州埴科郡森村（長野県千曲

市)の中条唯七郎が自らの体験を書き綴った日記(「徒然日記 附 地震大変録」³⁾)がそれである。中条唯七郎は、十月十八日に善光寺へ行き、『大地震』(『弘化四丁未年大地震并山崩・大火・水押・人死田畑水押有増記』)という板木物を購入し、その全文を日記に書き留めている。⁴⁾青木美智男氏は、このような中条唯七郎の行為を、中条唯七郎は長い間、地震の全貌を把握できずにいて、それを知るために善光寺門前に出向き、『弘化四丁未年大地震并山崩・大火・水押・人死田畑水押有増記』を買い求め、全文を日記に書き留めたとする。⁵⁾

自らが体験し恐怖を感じた地震の全貌を知りたいという願望のため、地震について記されている出版物を購入し、それを日記に写し記録しておいたというのである。この中条唯七郎の行った行為は、『虎勢道中記』の筆者と同じではなからうか。『虎勢道中記』の筆者は越後を旅行の途中、善光寺地震とそれに続く弘化高田地震を体験した。地震のとき「ただ念仏と萬歳樂を唱えるばかりで途方にくれ」、「この所の土となるかとか大いに心配」の心境であり、「噂ばかりで、未だ真実がわからない」、「噂話は大きくなるばかり」であったと記している。無事の帰宅を喜びつつ、地震のことをよく知るために、出回っていたかわら版を入手して地震のあらましを知り、旅の記録に書き写したのである。地震直後やその後に出版されたかわら版等は地震の全貌を知りたいと思う人々の重要な情報源であったことが理解されよう。

第二点は、三月二十四日善光寺地震の余震と三月二十九日の地震についてである。二十四日条には次のように記されている。

翌廿五日夜小震三度、同廿六日夜小震四度、夫今日々少しツ、折々震ふ、猶後廿九日同国三条町通け

る折、大地震^三而所の老女^若家より往来へ駈出、大さわぎをなす、此時昼九ツ頃なり、尤越後高田町近辺人家^{わし}押つぶれけるは此地震^さの節二而、前の善光寺辺の地震と八日限^{ちかひ}違けるよし、

本書には「善光寺地震が起つた二十四日の翌日二十五日には三度の余震があり、二十六日は四度の余震があり、その後はときどき余震があつた。二十九日の地震は昼九つ頃に起こり、三条町（新潟県三条市）を通りかかつた時のことであつた。この地の人々は道路に飛び出して大騒ぎとなつた。高田町（新潟県上越市）近辺の人家が押し潰されたのはこの二十九日の地震であつて、二十四日の善光寺地震とは日にちが違ふとのこと」とある。余震は二十五日と二十六日に最も多くその後は少なくなつたこと、二十九日の地震は小震ではなく大地震であつたこと、その地震を体験した筆者も善光寺地震とは別の地震であると認識していること、高田町の建物被害は二十九日の地震によるものであるという情報が当時から伝わつていたことが読み取れる。二十四日の善光寺地震と二十九日の弘化高田地震の二つの地震を体験し記録した史料として重要である。

第三点は、三月二十四日の善光寺の揺れはどの地域まで伝わつたのかについてである。地震の規模を知るさい、その揺れがどの範囲まで広がつていたのかを知ることが重要なことである。『虎勢道中記』には三月二十四日の善光寺の揺れをどの地域の人がどの程度感じていたのかについて記した記事がある。四月六日の鶴ヶ岡の項にある。

一、今日小国・温見川辺にて、去ル廿四日の大地震の様子、此辺にてハ如何哉^{すいふん}与聞合ける処、随分^{わもひ}ながきとハ思しかども大きとも存^{ぞんせ}ずと言、又翌日羽黒町に至り聞けるに、小き地震にて、中にハ知らぬ者もありけると言、其後奥州金台山へ参り承り候所、一向不存^{おもひ}与言、是ハ嶋故に地震是迄いるこ

と無き哉と問けるに、左にもあらず、折々地震いる事ありと言、誠ニ奇なるものなり

四月六日の鶴ヶ岡の条をみると、越後の出羽の国境、山街道庄内藩領の小国・温海川（山形県鶴岡市、旧温海町）のあたりにて、二十四日の善光寺地震の大地震の様子をいかにと聞くと、ずいぶん長い揺れと思つたが大きい地震だとは思わなかつたという。また翌七日、羽黒町（鶴岡市、旧羽黒町）に至り聞くと、小さい地震であり、中には地震があつたことを知らない者もいたという。その後、四月十五日に奥州金華山（宮城県石巻市、牡鹿半島の東南に浮かぶ島）へ参詣したとき土地の者に聞くと、地震のことはまったく知らないという。知らないのは島なのでこれまで地震がなかつたためかと聞くと、地震は時々起つていふことである。まことに不思議なことである、と記している。

この記事でわかるのは、新潟県と山形県国境の山形県側の山側の街道にある集落小国・温海川では、二十四日の善光寺地震は、地震の揺れは長かつたもののそれほど大きな揺れではなかつたこと、山形県羽黒山の麓の羽黒町辺りでは小さな揺れを感じたが、地震があつたことを知らない者もいたこと、宮城県牡鹿半島の東南の島・金華山では、揺れはなく地震が起つたことも知らなかつたことがわかる。小国・温海川・羽黒町・金華山での地震情報は、『虎勢道中記』筆者本人の体験にもとづく情報ではないが、すべて同一人が入手した情報であり、極めて重要な地震情報である。

以上、『虎勢道中記』に記された地震関連の記事をほぼすべて検討してきた。⁶本書『虎勢道中記』の筆者は旅の途中で一八四七年の善光寺地震とそれに続く弘化高田地震を体験した。自らの体験を記し、先々での地震の知見を書き留めた。さらには地震のあらましを詳しく記すために、後日かわら版を入手し、その全文

を書き入れた。そのことによつて、現在の我々は一八四七年の地震の貴重な情報を手に入れることができ、古地震を復元することができるのである。

注

- (1) 松浦律子・北原糸子「1847 善光寺地震（弘化四年三月二十四日）」『日本歴史災害事典』吉川弘文館、二〇二二年。
- (2) 北原糸子「近世の日記に見る旅と災害―19世紀庶民の旅日記「虎勢道中記」を中心に―」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』四号、神奈川大学、二〇〇七年。
- (3) 中条唯七郎著・中村美美子訳・青木美智男校註『善光寺大地震を生き抜く 現代語訳』弘化四年・善光寺地震大変録』日本経済評論社、二〇一一年。
- (4) 前掲注(3)。
- (5) 青木美智男「本文を読まれる前に―絶え間なき余震を生き抜く民の記録」前掲注(3)。
- (6) このほかに、四月六日条の鶴が岡の項では、象潟の風景が一変した一八〇四年の地震についての記述がある。さらに、四月十四日条の渡の波（わたのは）の項では、「三人連つれにて出立なせし所、彼信濃かのの大地震の噂うわさを聞、国元を案し、兩人にんハ下野へ帰かへり、此堅蔵こしどのハ出羽山形にてわかれ、己その言人残り今此松しまへ来り、よき連もあらば是より金花山へ参らんと思ふ所」とある。堅蔵は「下野日光の役人蓮見堅蔵」のこと。なお、北原氏は地震に遭い、三人連れのうち二人は帰宅したとする（前掲注(2)）が、二人は地震の噂を聞いて帰国したと記されている。